

名著、再び

第百七十五回

「AI万能神話」に
足を掬われない術を
「知的異種格闘技戦」から学べ

人 類学者・霊長類学者の山
極寿一氏（京都大学元総
長）とキリスト教神学者・宗教
学者の小原克博氏（同志社大学
神学部長）による刺激的な知的
異種格闘技だ。

山極氏は自らの方法論につい
てこう述べる。〈我々の研究方
法は、サルになってサルの歴史
を書け、あるいは、ゴリラの気
持ちになって、ゴリラのやって
いることを理解せよというもの
です。日本の霊長類研究をつく

った今西錦司先生はそうおっし
やって、学生たちをそれぞれの
フィールドに送り出しました。
今西先生ご自身はサルだけでは
なく、ウマやウサギなども学生
に調査させましたが、人間社会
の起源を探る上では、ヒトに近
い霊長類がびつたりだろうとい
うことで、サルを研究の中心に
据えられました。サルを単なる
研究対象とするだけでは不十
分で、サルになることが研究上
不可欠だという立場だ。人間が

サルになることはできない。し
かし、サルにならなくてはなら
ない。この「不可能の可能性」
に挑むことがサル学の方法論な
のだ。

この方法論は神学と親和性が
高い。神学者を含め、人間は神
ではない。神と人間は質的に異
なる存在なので、原理的に人間
が神について語ることはできな
い。しかし、神学者は神につい
て語らなくてはならない。この
ようにして「不可能の可能性」
に神学者は挑むのである。小原
氏は、山極氏が「了解」と「理
解」を区別していることに注目
し、〈山極先生は意識と知能が
分離されることの危うさを指摘
し、それぞれが対応する「了解」
と「理解」の違いに注意を促し

ています。「理解」をロゴス（言
葉）や論理の領域の働きとして、
「了解」を身体的・直観的な領
域の働きとして区分し、後者が
AIの発達によって置き去りに
されることを山極先生は危惧さ
れていますと述べる。頭で理
解するだけでは不十分で、身体
全体で了解することが重要な
だ。キリスト教を理屈だけで理
解することはできない。イエス・
キリストを信じることによって
救われたと各人が身体全体で感
じ取ることが必要なのだ。
同志社大学神学部は、日本基
督教団（日本におけるプロテス
タントの最大教派）の認可神学
校なので、そこではプロテスタ
ント神学が教えられる。カトリ
ックは救済のためには「信仰と

行為」が必要であると考える。対してプロテスタントは「信仰のみ」だ。これはプロテスタントが行為を軽視しているという意味ではない。信仰即行為なので、信仰と行為を切り離せるというカトリックの信仰観に異議を申し立てているのだ。信仰と行為は異質だが、異質な概念を「即」という言葉によって限りなく近づけることをプロテスタントは試みるのだ。これは京都学派の西田幾多郎の哲学に似た構成だ。

山

極氏は西田哲学についてこう述べる。〈西田幾多郎は、行為的直観というをよく口にしますが、この行為的直観というのは、もともと空間と時間は別の秩序を表すものであって、今の自然科学で人間を表そうとすると、別々の形で表すしかない。しかし、それを直観によって感じる事ができるのが、人間であり、生命であると言っているわけです。／西田は「即」という語をよく使います。機能即構造、一即多、多即一などですが、まさにここに重要なことが含まれていると思

ます。生物は動きの中にいるわけです。動きが感じられるというところに生命の本質がある。だから、鴨長明じゃないですが、ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらずだとか、そういう表現が大事だというわけです。生物というのは自分一人では流れを感じることはできない。他の生物と共存していき、他の生物、あるいは、人間に同調していたりする中で、生命感を得られるところがあるんだと思うんですね。それを我々人間は直観と言います。行為によって直観というものを具体化してきた。しかし、自然科学というものは、簡単に言えば時間を空間化して、つまり視覚化して提

示する方法を開発してきたわけです。行為的直観の立場を取ると、森羅万象が動きの中にあることになる。キリスト教における神も静止せずに常に動いている。この点に関して、小原氏と山極氏の議論は噛み合っている。小原氏は、直観を重視する。

一瞬もとどまることなく変化し続ける環境の中で、次の状態を予測するというのは非常に難しいことですが、それを可能にする直観なしに生物は生き残ることができませんよね。どのような生物も環境との相互作用の中で自己認識し、その意味で主体性を持っています。AIの場合には、厳密に定義されたア



著者 博克原 / 一壽極山
『人類の起源、宗教の誕生』
ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき

平凡社新書より
2019年に刊行

ルゴリズムがなければ動作できません。身体を持たないAIから主体性が出てくるかどうか、かなり疑問です。素人ながら、私が汎用型AIの誕生に懐疑的なのは、こうした点に理由があります。／キリスト教神学の世界では、主体性という言葉に関連して、自由意志が論じられてきました。人間には自由意志があるのかどうかということですが、五世紀にはアウグスティヌスはその問題を論じていましたし、一六世紀の宗教改革の際には、エラスムスが『自由意志論』を、ルターが『奴隸意志論』を著して、両者は激論を交わしました。キリスト教の伝統的な言い方をすると、人間は原罪を負っているのです、正しいことを思っても、それを実践する力を持たず、神の恩寵によってしか正しいことをなし得ない、ということになります。神と人間の関係に法則性はない。神は人間の歴史に恣意的に介入する。神をアルゴリズムのような計算手順に還元することはできない。こういう神学的基本がしっかりとされているので、小原氏はAI万能神話に足を掬わないのだ。